

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	行動する保守の論理（４）
Author(s)	樋口, 直人
Citation	茨城大学地域総合研究所年報, 45: 161-176
Issue Date	2012-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10109/3167
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

「行動する保守」の論理（４）

——「さらなる右」としての排外主義を实践するδ氏の場合——

樋口直人（徳島大学総合科学部）

要約

本稿では、外国人排斥を掲げる団体「排害社」の代表たるδ氏に対する聞き取りの記録を掲載する。日本の右翼は、排外主義を前面に掲げてきたわけではないが、右翼の本音として排外意識が底流にあることを代弁するのが、排害社の目的だという。これは、2000年代後半になって街頭に立つようになった「行動する保守」と呼ばれる排外主義運動の一部であるとともに、右翼思想に傾倒したδ氏が右翼から排外主義を掲げた点に特徴がある。同時に、旧来型右翼が排外主義を表立っては示さない状況に対して、自らが「排害」を掲げることで右翼言論の幅を広げることを狙いとしている。

キーワード：極右、右翼、移民排斥、社会運動

1. 右翼と極右の間——問題の所在

戦後の右翼運動は、赤尾敏、笹川良一、児玉誉士夫といった「大物」の来歴が示すように、戦前のそれと強い連続性を持っていた。ただし、戦後右翼では天皇制に象徴される権威主義的な伝統主義に加えて、反共主義が中核的なイデオロギーとなってきた（堀 1993）。それに対して、2000年代後半には排外主義をイデオロギー的な主軸とし、直接行動に訴える右派の社会運動が発生した（安田 2010, 2011）。在日特権を許さない市民の会などを中心とするこれらの運動は、本人達の自称を借りた総称として「行動する保守」とくくられる。「普通の市民」による活動、公衆の面前でのヘイトスピーチの多用、インターネットを通じた情報発信と勧誘、強い直接行動志向など、この運動は従来の右翼とは異なる性質を多く持つ。

運動形態における市民運動との共通性などは別途考察するとして、ここでは排外主義を前面に出す運動イデオロギーに着目したい。ムデは、極右の広義の構成要素として伝統主義や修正主義、福祉ショービニズム、国家主義などを挙げつつも、必ずしもすべての極右政党がこれらの条件を満た

すわけではないとする（Mudde 2007）。それゆえ狭義の定義が必要になり、どの政党にも共通する要素としてナショナリズムと排外主義（nativism）があるという⁽¹⁾。この2つの要素について、主流の右派よりさらに「右」よりの主張をする政治勢力として、極右を定義できる。

こうした定義に照らせば、現在の排外主義運動は西欧に近い極右運動の出現と考えてよい。ただし、極右を生み出す地政学的な条件の違いから、「日本型排外主義」という概念規定が必要だと筆者は考えている（樋口 2011）。そうした観点からすると、排外主義運動に関わるδ氏（20代男性）の経験は興味深い。δ氏に対しては、2011年11月1日に東京都内で聞き取りを行った。話が脚色されているくらいはあるが、新たな右翼運動の旗印としての排外主義に至る可能性について、彼の議論は示唆的である。次節以降では彼に対する聞き取り記録を掲載する形でみていきたい。

2. 右翼に対する関心

外国人ってのは、遠足なんかで外国人を見つけたら「おお、ガイジンがいる」ってみんなね、きゃ

んきゃん盛り上がっているくらい田舎ですから。だからそれについては、別に何か恐怖心だとか嫌悪感だとか持ったことってのはないですね。

子どもの時に、国会中継を見るのが好きだったんですよ。小学校2年生、3年生くらいですかね。国会中継見るのが好きで、共産党が好きだったんですよ。5年生6年生の時くらいは、『赤旗』読むようになってましたね。街頭に『赤旗』が貼ってあるんですよ。田舎の方に行ったら赤旗掲示板というのがあって、田んぼだから、そこでさしてあるんですよ。登下校の時に読んで、今国旗国歌法がこういう問題なんだ、自民党がこういう政治献金の問題起こしてるんだ、そういうのを見てたわけなんですね。

それと同時に街を走っている右翼の街宣車を見てですね、「何だ」と親父に聞くわけですよ。真っ黒なバスが軍歌鳴らして走っているものですから。「何だ」といったら「あれはな、右翼といってヤクザがアルバイトでやっているみたいなものだ」。「ヤクザってアルバイトするもんなのか、それが右翼ってもんなのか、へんな仕事だな」と思ったんですよ。

共産党に対する好意と右翼ってものに対する興味というものが、半ば同居して小学校6年生くらいになってったんですが。その年に共産党の不破委員長の中国訪問がありました。それまで共産党と関係が断絶してましてね、あれを不破——当時の委員長が訪中して会談を一席して、「日本が先の大戦で侵略して申し訳ありませんでした」という風にもすごく深謝した。その当時の江沢民国家主席が高く評価したという記事が、赤旗の一面の大きく出ていたんですよ。それを見たとき僕は、ショックというものではないですけど、何か言い知れぬ違和感が起こったんですね。経団連や自民党という大きな権力に対して共産党というのはかっこいいものだ、すごいものだと思ってたんですけど、自民党や経団連よりももっと大きな権力である中国共産党には膝を屈してしまう共産党って何かおかしいんじゃないかと思って。

それでちょっと、思想的に宙ぶらりんになって

いた時期があったんですけど。それで中学校2年生になった頃ですね、学校の自習の時間で、読売新聞や毎日新聞が分厚い『20世紀の記録』という本を出しているじゃないですか。写真入りのこう——あれが好きなもので、時間があればあれをずっと1901年からずっとページをめくって世界で何があったか、日本で何があったかを見ていったんですけど。その時に、昭和35年の10月12日に社会党委員長が刺殺された事件の写真が毎日新聞に掲載されたものですね——あれがのっていて、社会党委員長を刺殺する17歳の右翼少年って書いてあったんです。それで、実行した山口少年というのが事件から半月後に鑑別所で自殺したと。

アルバイトでやっているはずの人が、なんでこんなことするんだ？しかも僕と3つしか違わん人間がなんでそんなことするんやと。これはアルバイトじゃなくて、何かその、唯物的なお金であるとか、そういうものを超越した価値観がそこにあるんじゃないかと。右翼って何かっていうのを中学校のときにそれで、いろいろ本を調べようと思ったんですけど、何もとっかかりがないわけですよ。そんな時、僕の担任の先生がいまして、副担任の人がいるんですけど——担任の先生はもうバリバリの左翼の先生だったんですけど——ある日どうしてか風邪をこじらせて寝込んでしまって、学校に来ない日があったんですね。

その時に副担任の若い女性の先生だったんですけど、その先生がホームルームの、放課後のホームルームで最後に一言スピーチをしますけど、あの時にその若い副担任の女性の先生がですね、担任のあの先生はいつもああいう風に言っていますけども、皆さん方は日本人であります。日本人としての誇りを持って、日本人としての誇り、日本人とは何なのか、そういうことを勉強するためにも、皆さんに読みやすいように小林よしのりさんの書いた『戦争論』というものがありますんで、これを皆さんブックオフでもいいですから読んでください、そういう話をされたんですね。若い音楽の先生で、今の僕と同じ歳くらいになるんじゃないんですか。

僕もその頃、古本屋にいて本を読み漁るのが好きだったものですから、小林よしのりで探してたら、『おぼっちゃまくん』が出てきてこんなもの読んでも日本人って何たるかなんてわからないから、『戦争論』で探したら『ゴーマニズム宣言』が出てきて。今は『新ゴーマニズム宣言』になってますが、前の『SPA!』に連載された『ゴーマニズム宣言』の1巻からずっと読んでいて。そうしたら欄外のところ小さく文字で書いてあるじゃないですか、「謙虚かましてよかですか」って。あのところに「わしは右翼は嫌いじゃけど、右翼の赤尾敏や野村秋介が言っていることもわかる」って書いてたんですよ。あれはまだ皇太子殿下がご成婚される前のゴーマニズム宣言だったと思うんですけど。野村先生も赤尾先生もご存命の頃だったものですから。

それで僕は右翼ってものの中には赤尾敏と野村秋介というのがいるんだということを知ったんですよ。それで図書館に引き返して、『日本人名事典』というこんな分厚い本があるんですよ。そのこんな分厚い本の中から、あ行から赤尾敏を探して、の行から野村秋介を探して、その名前をみて生涯の生き様をみて、「ああ、すごい生き方をしているな」。それで著作ですよ、全部メモ帳に書いて。地元の古本屋に行って書棚を隅から隅まで探したら、あったんですね。野村先生の最後の著書である『さらば、群青』という本なんですけど。

その本があって、こんな分厚い本で、それを買ったのが中学3年生の時ですから、高校受験そっちのけでずっとそういう本ばかり読んでいたら、高校受験も案の定失敗して。高校は全部志望校は落ちますね。志望校全部落ちたら、県内の一番最底辺の偏差値がもう測定不能くらい低いような高校に入ったんですよ。数学の授業が、足し算引き算から始まるんですよ、高校でも。数学の教科書がこんなに薄くて、何かパンフレットみたいなくらい薄くて。国語の授業で、あいうえおの書き取りをやるんですね。そんな高校があるんですよ。

そういう所に入ったものですから、宿題がない

んですよ。不良ばかりですから、クラブ活動がまったく盛んじゃないんですね。だから学校は早く終わるしすることもないしで、本を読む時間ってのがとにかくすごくできたんですが。だから、高校時代もとにかく右翼民族派の本と、あとは昔の歴史の本と、あとはマルクス＝エンゲルス、毛沢東、レーニンですね。『資本論』だけは未だに手付かずなんですけど。高校時代、宿題がなかった分その本を読んでいることができたね。それは1つの人間万事塞翁馬、瓢箪から出た駒っていいですかね。それでやっぱり政治ってものに目覚める1つの流れとしてあって。

それで、大学に行くつもりはなかったんですよ。もう今の大学は面白いところもないし、学生も情熱は持っていないし。大体もう、高校の近くを通り過ぎる大学生を見ていても感じてましたから。ただ僕は、さっきちょっと話そびれちゃったんですけど、小学校のときから昔の全共闘運動とか全学連の運動——昔のこんなことがありましたって振り返るような映像が、テレビ番組でやっているじゃないですか——あれを見るのが好きでした。あの大きい立て看板作ったり、投石したり火炎瓶投げたり警察と——僕もちょっとやってみたい、と思ってたんですよ。で、〇〇（出身地）にそんなものないですから、そうすると東京に行ったらそういうのあるのかな。東京に行ってみたいなと思ってたんですね。

そこである時ちょっと雑誌を読んだら、国士舘大学というのがあって、入学式は軍艦マーチで日の丸を掲げて、白馬に乗った館長先生が先頭を行進して、みんな抜刀隊の分列行進のもとに行進して、天皇陛下万歳と。こんな大学があるのか、こんな大学に入らずに死ぬことはできんと思って、それでも国士舘大学に入ることにして、上京して。滑り止めなんかも一切受けずに。国士舘をこれで落ちたら、一生〇〇で百姓やろうと思ってたんですよ。僕はそれまで英語数学が全然できなかったものですから。偏差値も32か3かそんなもので、「国士舘絶対入れんから目白大学とか高千穂大学だったら、これなら入れるぞ」。聞いたこともな

い大学だったんですからね。

国士館に入るためだったと思って、夏休みの初日から終わる日までほとんど外出もせず真夏なのに顔を真っ白になるくらい家でずっと英語の勉強してたんですよ。英語の映画があるじゃないですか。あれに字幕を入れたり入れなかったりして、それでリスニングやって、聞き取りやって。その、最後はもう英語の映画の会話を聞いただけで、それをもう聞きながら書き起こせるくらいになったんですよ。そうしたら、一夏で偏差値が50なんぼくらいまで上がったんですよ。そうしたら国士館狙えるじゃないかって先生から言われ・・・。

で、2つ試験受けたんですよ。一般入試とその前に推薦入試受けることになって。推薦入試受けたら論述式じゃないですか。論述式の方を受けたんですね。そしたら問題用紙があってぱっとめくったら、「あなたは拉致問題についてどう思いますか」って問題が。過去問題がいいんですよ。前の年の過去問題が「あなたは愛国心についてどう思いますか」が、推薦入試の前の年だったんですよ。同じ柳の下にドジョウはいないですから、今年はそんなことは多分聞いてこないだろうなと思ったんですけど。そうしたら、今年は拉致問題についてどう思いますか——試験の前の日までずっと横田早紀江さんの本とか、拉致問題の二冊三冊ずっと読んでたもんですから、横田めぐみさんは昭和何十年何月何日に新潟港で拉致されどうのこうのって、細かいことまでびっちり書いたら、すぐに「どうぞうちの大学に来てください」。それはやっぱり嬉しかったですね。

3. 大学時代の活動

上京する前に、インターネットで東京都内で活動している右翼団体の定例街宣の日時ですね、何月何日何曜日どこで街宣やってるって。当時いっぱいホームページに出てたんですよ。それを全部一覧に書き出して、あとは服と荷物を軽く持ってそのまんま東京に行って。大学の入学式の翌日には、大学の民族派系の学生団体に入って。その日からピラ配りをして。そこから運動に参加するよ

うになりましたね。

(加入した学生団体は)勉強会ですけど、なんというんですかね、人数が——野球部でもなんでもそうですけど、人数がいっぱいいるところってのは急に何かをぱっと変えられないじゃないですか。でも10人から15人くらいしかいなかったですから、僕が入ってから勉強会だけじゃちょっと少ないから、デモにも行ってみるか、集会でも行ってみるか、選挙の手伝いにも入ってみようかと。それはもうかなり自由にやれましたね。

大学以外でも右翼民族派団体の街宣にはずっと参加して、マイクを持つようにもなりましたし。その頃僕はもう、運動体の違いにこだわらずとにかくやってたんですよ。僕は元民主党員なんですよ。民主党の党籍もあったんです。今はないですけどね。

とにかく日本のためになると思った運動は、全部片っ端からお手伝いしましたね。日本会議のお手伝いしたこともありますし。救う会のお手伝いをしたこともありますし。民主党の党員に一応なったのは、拉致運動やってた当時の民主党の議員たちとのお付き合いとの関係で民主党の党員になって。党員だったか周りにいるサポーターとちょっと分けてるじゃないですか、あのどっちに入っかは僕はわからないですね。どっちかには入れられなかったんですよ。

で、民主党に入って民主党の手伝いして、ポスター貼って回ってたんですよ。当時岡田克也が党首だったものですから。そうしたら、その事務所に「ちょっと来週岡田代表がうちの事務所にみえるから、ちょっと来週は来ないでくれ」。「来週来ないでくれ」と手伝っとる人間に失礼なことを言うやつやなと。民主党の手伝いもして、その頃右翼の運動もしてましたから、午前中は街宣車乗って戦闘服着て、民主党の事務所に——本部ですよ——街宣出て叩き潰せとやって、僕はそのまま民主党の事務所に行って、戦闘服からポロシャツに着替えて「すいません、ポスター貼らせてください」って一軒一軒歩いてたんですよ。さすがにこれはおかしいなと、自分でも思うようになっ

たですけど。

そうしたらある日、街宣車運転してたら先輩が「今日どこに行くんだ、民主党でアルバイトか、いいよいいよ連れてったるよ」。そうしたら候補者が演説している真横に街宣車止めて僕を「はい、お手伝い連れてきました」とやっちゃったもんだからご破算です。とにかくもう、いろいろ何でもかんでもやってましたね。民主党のもやってましたし、自民党の選挙の手伝いもしましたし。それから、チベットの人権問題の運動もやりましたね。あれもされてるのは半分くらい人権意識の高いリベラルな左翼の人と一緒にやっていて、お酒飲んで仲良くなりましたし。それから今、行動する保守とされる運動もやりましたしね。

（こうした団体には）自分から行くんですよ。「自分でホームページ見てきたんですけど、ちょっとお話をかわせてください」って話を聞くんですよ。当時僕は、町田に住んでたんですよ。で、もう絵に描いたような貧乏学生で、とにかく運動がしたかったんですけどアルバイトする時間も全然ないものですから、輪にかけて貧しいもんで。月に1万円ちょっとしかお金がなかったんですよ。一日の食費に2,300円に切り詰めてパンをかじってもっているようなもので。電車にも乗ってられないですから。移動はもう全部自転車で。

町田から街宣があるって聞いたら、上野や新宿渋谷まで自転車で行き来してるんですよ。片道2時間半。町田と狛江あたりの山や谷を抜けて。で、最初街宣に行ってる人たち——来てる右翼の人たちは「自転車で来てるからその辺から来てる子なんだろうな」といって。ある時話したら「どこに住んでるの」「町田に住んでるんですよ」「町田から自転車で来てるのか」。それから皆さんと仲良くなりましたね。そうしているうちに、自転車を街宣車に放り込んで、街宣車で送ってくれたり、ありましたけど。

（活動に参加する）抵抗はなかったですね。東京の右翼ってカジュアルなんですよ、ヘンな話ですけど。田舎のほうの右翼ってのは、みんなばっちり戦闘服着て街宣車もいかめしいのが多いので

ですけど、東京は同じ系列の右翼でもみんなスーツか私服か、とっつきやすい格好ですね。いったんそういう右翼の人と面識ができれば、右翼の人ってのはびっくりするくらい顔が広いですから、そこから一気にいろいろな人を紹介していただいて。だから大学の1年生2年生の頃までには、随分な数の方々とお知り合いになったんじゃないかなと思いますね。

大学には通って単位も全部取って、単位を1つも落としたことないですけどね。大学の単位は1つも落としてないですよ。及第点をとって、落第点をとったこともないです。大学3年生の時には卒論だけにしましたので。1年生2年生3年生で単位を、規定の単位のうちの卒論残して全部履修して。で、4年生には卒論だけになるわけですから。月の登校が4日になったんですけど、そうしたら担任の担当のゼミの先生が運動に理解がある人で、「お前は日本のために頑張ってるんだから、軽いレポートを毎週原稿用紙3枚提出すれば次週の授業は出席扱いにしとくから」。そういうことをおっしゃってくださったので、大学には4年の時には月に2回しか通わなかったですね。授業に出なかったですね。あとは学食が安いから食べに行っていたくらいですけど。

徳島も〇〇も同じだと思うんですけど、何も刺激がないですからね。たとえば僕なんか〇〇帰ってちょっとのんびりしてた時にですね、朝起きて新聞を読んで、「ああ、ロシアがまた日本にとんでもないことしやがった」「じゃあロシア大使館まで抗議にいかうかな」と思っても「ああ、〇〇だったか」となっちゃうんですよ。〇〇だとか徳島だとか田舎で何かしようと思っても、行くところが県庁か市役所か、民団・朝鮮総連の支部くらいしかないです。

それに比べれば東京ってのは、そのものが片道160円のメトロの切符一枚で行けるとところにあるわけですからね。とにかく本当にあらゆるものが新鮮でしたしね。抗議行動だけに限らないですけど。人間の数がもう圧倒的に多いですもの。たとえばその、東京が1,000万ですかね。人口で何倍

といっても、刺激といいますかね、人間の付き合いの広さや面白さというのは、それと比例するわけじゃないですからね。10倍20倍30倍、もっとあると思いますね。運動の面白さ、というよりは東京の面白さになっちゃいそうですけど。非日常の連続というのは、とにかく若かった頃の学生時代にとっちゃ面白かったですね。

4. 行動する保守との邂逅

(1) 右翼から行動する保守へ

右翼の運動も、2年3年もやってますと、なんだか毎年やってることが一緒になるんですよ。1月2日に皇居に新年の一般参賀に行って、2月7日に北方領土の運動をやって、11日に建国記念日の運動やって、8月15日に靖国神社に行って、8月9日にはロシア大使館に行き暴れて。毎年一緒に、でも日本を取り巻く情勢は毎年一緒なはずがないわけで、それなのに「何でこの人たちは毎年一緒のことやとるんだろうな」って。

それに若い人が全然入って来ないんですね。気がついたら僕も右翼の世界に片足突っ込んで、6年も7年もたつのに僕の後輩が全然出てこないんですよ。で、上にはどんどんどんどん年取った連中だけがどんどん吹き溜まりのように溜まっていて。若いのが気がついたら、ずっと僕がお茶くみさせられて——若いからしょうがないですけど——若い人は興味持たなくなるんでしょうね。

右翼とお付き合いしてましたのが、平成16年で1年生の時ですけど、その年から「行動する保守」っていいですか、「保守」自身は年に2、3回はデモはしてたんですよ。台湾を支援するという。中国共産党に反対するデモだとか。ただ、頻度は圧倒的に少なく、内容としてもすごく大人しかったですよね。平成17年夏からのお付き合いは、集会とかデモとか、たまーに集会とかたまーにデモとかで挨拶するくらいのお付き合いだったんですよ。で、その翌年にチャンネル桜ってあるじゃないですか。あそこが大きな拉致のデモをやって。で、(δ氏の)学生団体も(デモに)入ってました。

それで平成18年に在特会が——18年ですかね、在特会ができたのは。同じ年にですね、当時ブログ人気プログラミングというのがあって、その中で第二位の人気を誇ってた「極右評論」が、日本を変革させるためには国会に極右の勢力を台頭させないとしないと。今までになかった論調だったんですよ。そうしたら瀬戸さんはどうするかっていったら、自民党にも民主党の右派にも期待できない。今在野ではあるけれども、維新政党・新風にそれを期待する。維新政党・新風への大々的な支持を打ち出したんですね、連日。

これがまた運命の不思議なもので、瀬戸さんがそういう2週間前にですね、僕、維新政党新風に強制的に入党させられてるんですよ。いや、入る気全然なかったんですけどね。朝飯食べようと思って新宿に出てきて、ほっつき歩いてたら、向こうから新風の今の代表の鈴木さんともう1人新風の党員が歩いて来て。右翼運動を通して顔見知りだったから、「ああ、どうもおはようございます」といったら、「おい飯食ったか」「まだですけど」「じゃあ飯食わしてやるからちょっとこっち来い」。街宣車が止まっているんですよ。街宣車の中で食わしてくれるのかなと思ったら、ボタンとドアを閉めてそのまんま発車して。

夕方まで街宣車の上で日の丸持つ係をさせられて、弁士が「皆さん拉致問題というものはですね」としゃべってる——「拉致問題もいいけど、人を拉致しておいて拉致問題もねえだろう」。そのまま事務所に連れて行かれて、「はいこれ、入党用紙だから」って入党申込用紙に記入させられてね、それで新風の党員になったんです。で、まあ特にやる気もなく党籍だけお付き合いだのと、新聞を購読するのもお付き合いだと思って入ってたなら、瀬戸さんがブログで盛り上げてくれて、そうしたら瀬戸さんが桜井誠さんを口説いて。

当時、在特会は1,000人もいなかったんですね。超弱小勢力。で、それに西村さんがくっついて、ほとんどその当時の在特会といったら勉強会ですね。やることは勉強会と集会の繰り返しだったんですけど、西村さんがくっついたなら今度は直接行

動するようになったんです、この三者がくっついて。それが「行動する保守」の誕生ですね。だから瀬戸さんが新風への支持を打ち出して、それを結集軸として桜井さんと西村さんが集まって、新風の選挙が終わってから新風が凋落して、この運動は別個に「行動する保守」として残って現在に至っているというような形じゃないかなと思いますね。

新風の時には最終日には桜井さんがいらっしゃる予定だったんですけど、お仕事の関係でいらっしゃらなかったの。西村さんはお手伝いに来てまして、その時瀬戸さんを比例代表候補にあげましたんで、とにかく瀬戸さんを盛り立てていく。だからどっちかといったら、「行動する保守」が新風という器を借りて議会制選挙に挑戦した、結集軸として集まったというような形ですかね。

僕は黨員だったんで、盛り上がってきたから楽しそうですから連日——大学の４年生でしたしね。平成19年に入って——３月ですけど、新風の学生部長に任命されたものですから。それでもう連日やってましたね。その翌年からですか、新風の選挙が終わって在特会や主権回復を目指す会の運動がどんどん頻度も増えて、内容もどんどんどんどん今までにないアグレッシブなものになっていくにつれて、従来の保守的な層から成り立っている新風としてはこれに違和感を持つようになって。平成21年の４月に民族差別的な言動を許さないとする声明を新風が出して、そこから大きく行動保守の人脈と新風を起点とした人脈が決別した——表層的には決別したような感じですね。（しかし）今でも新風の黨員です。政治ってのはそういう争いがあっても、立場が近い者について、それを盛り立てるのが政治的態度でありますから。そこでトロッキーみたいに南米に追われてしまったら敗北ですからね。

（２）右派にとって未開拓の領域

で、「行動する保守は何でやれたんですか」って他の方が聞かれたことなんですけど、１つは未開拓の領域への参入ってことだと思うんですね。

右翼ってというのはすごい敷居が高いわけですよ。みんな声をかけづらい。声をかけて話づらい。ちょっとお聞きしたいんですけどって言ったら、「何だてめえ、この野郎」とされるんじゃないかという先入観がありますからね。敷居が高いですけど、行動力は従来の右翼って街宣車も駆使して高い行動力を持っています。

保守ってのはどっちかという敷居は低いですよ。やることは皆さん参加してくださいという集会を開いて、その中で先生を呼んで拍手をして。で、終わったら居酒屋に行って、ああよかったよかった。敷居も低いけど行動力も低いわけじゃないですか。そうすると、敷居が低くて行動力が高いという、一番必要とされている広大な分野がずっと未開拓であったわけですよ。日本の戦後のナショナリズム運動というのは。その広大な未開拓な——最近の経営の本で読みましたが、ブルーオーシャン理論というのですかね、青い広々とした海があって、それがまったく手付かずであると。その領域を埋めたのが「行動する保守」ってものなんじゃないかと思うんですね。

５．排外主義へ

僕は別にシナ人が嫌いなわけじゃないんですよ。ただそれが日本で外国人が増え、日本の社会秩序が悪くなる、日本の社会秩序が歪むとなるからこれを排除すべきであると。移民に対する好き嫌いとは別の問題ですからね。

（排外主義に行き着いたのは）日本人にそれが一番必要であるにもかかわらず、一番欠如しているからだと思うんですよ。というのも、保守——右の中でも分裂しているというのは、これは今に始まったことじゃないと思うんですね。日本人の外国人認識というものは、非常に拙いと思うんですよ。1500年前になりますけれども、仏教伝来に対して物部氏と曾我氏が論争するんですが。論争してる中身を読みますと、物部氏は仏教の伝来に対して異国においても仏を拝んでいるのでから、これを取り入れるべき…。あ、逆ですね。曾我氏が受け入れを説いたんですね。物部氏は我

が国には八百万の神々がおわしまして、異神を拝めば必ず災いを来たす、こんな風に言って排斥するわけですね。でもこれは両者とも仏教とは何なのかということを論じていないんです。外国で拝んでいるのだからいいんじゃないかという姿勢と、外国から来るのはダメだという姿勢と。両方とも外国から来るものは何なのかというものに対する理解がない上での議論ですから。

今の日本人の外国人——外国を受け入れるにあたっての姿勢というのは、この時代に毛が生えたぐらいじゃないか、本質的に変わってないんじゃないかと思うんです。だから保守派、いわゆる右派の中に民族差別がいけない、悪い、いや仕方がない、民族差別はやったほうがいい——そんなことなかにかいう奴はいないんですが。そういう議論が起こると、曾我氏と物部氏の議論のレベルの延長に今はあると思っています。

(外国人に関心を持つ) きっかけですか。東京に来たときにですね、居酒屋に行きますと店員がシナ人しか——ほとんどいないんですよ。コンビニもそうだし大学もそうだし。どこに行ってもいっぱいいる、〇〇から来たらこれはやっぱり「こんなにいるものなのか」と思うくらいだったんですよ。ところが、あまりにも多すぎやしないかな。実際に統計の数字をとってみても、まあこの10年間で、だから僕が東京に来たときよりも、8年前からよりも2倍以上に増えているわけですから。それに対して右翼——右翼といいますか、保守の方が「外国人の排斥排除はよくない」ということを言っていること自体に危機感を持ったんですね。

確かに右翼の中には(排斥を唱える者も)いましたが、保守ってのは決定的に薄かったですし。むしろ外国人の排斥なんてのが出てきたら、日本は八紘一宇なんだから、日本はアジア主義なんだから、天皇陛下の…外国人を排斥するような言動に保守が反対してみせるわけですね。僕はこれに危機感を持ったわけですよ。聞いてみれば、彼らはそれは本音じゃないんですね。酒を飲めば「シナ人朝鮮人なんて冗談じゃねえよ」って保守派の先生なんか言うわけですよ。『正論』や『Will』

に書いているような先生方が。でも、いざ講演をする時や雑誌に書くときになれば、「いや、天皇陛下はそういった排外主義はお喜びにならない、中国や朝鮮の方々と仲良くするアジア主義の理想こそ我々の祖先が大東亜戦争で戦った」。——おいおい、ちょっと待てよ。居酒屋で言っていることと講演でしゃべっていることが違うじゃないか。それは先生に限ったことではなくて、他の一般の保守層の方々のホンネの部分なんですね。

まあ実際に本気で思っている人もいますけどね。外国人と仲良くしなきゃいけない、外国人受け入れなきゃいけない。展転社の20年前くらい出た本で出てくる保守系とされるおじいちゃんたちが、日本はヤマトの国だ、和を持って和を大きな国なんだから、外国人の移民を受け入れないというのは偏狭だ、と保守派のおじいちゃんたちが言っているんですよ。

僕は、これはちょっとその認識が危ないなと。特に日本人全体にそれを求めるわけにはいかないですけど、オピニオンの先頭に立つ保守や右派にその気概が欠けてるのは、ちょっといかなものかなと思って。まあそういう先生とか話をしたんですね。そうしたらその、「いや、そんなこと言ったら講演や執筆の仕事がなくなっちゃう」というのですね。彼らは、大学でも教鞭をとらなきゃいけないし、講演で講演料も稼がなきゃいけないし、筆して原稿料をもらわなきゃいけない立場で、急にそういった急進的なことを言える立場ではないです。ただそれは、思想的にも学術的にもすごく不誠実な態度だと思うんですね。まあ、結論ありきというのは、イデオロギーに携わっている人間には致し方ないことかもしれないですけど、知っていて思っていてそれを言えないのだったら、それはきわめて不誠実。でもまあ、彼らにも身すぎ世すぎがありますから。

外国人もいろいろだと思いますけど、僕はブラジル人がいっぱい増えても電車の中がうるさくなるとコンビニの前でたむろする若者が増えるだけだと思いますし。フィリピン人が増えても、怠け者がちょっと増えるくらいで、生活保護を受給する

母子家庭が増えるくらいで、ちょっと場末のキャバクラで人余りが起きるくらいです。トルコ人が増えても、ケバブ屋がちょっと共倒れするくらいだと思ってますよ。

そういった人々と決定的にシナ人ってものが異質なのは、自分達の街を作っちゃうんですね。そして日本国籍とっても日本人にならないんですね。アメリカでもフランス、カナダでもそうですけど、その国の国籍をとっても自分は華人なんだっていう特別な意識を持っているんですね。

そこ行ったらのケバブ屋があるんですけど、そのケバブ屋はですねえ、ニイハオって呼び込みをしているんですよ、トルコ人が。トルコ語でこういう言葉あったのかなあと。・・・で、会計しましたら謝謝、再見っていうのですよ、トルコ人が。「兄さん、俺日本人だから・・・なんでそんなこと言うんだ」。そしたら隣が小籠包屋なんですよ、シナ人の。トルコ人のお兄さんが「隣の中国人のおばさんから『この街は私たちの街だから、あなたもこの言葉覚えた方がいいよ』と言って北京語を教わった」と。私たちの街だから・・・びっくりしましたね。

上野だけじゃないんですね。池袋にかけてもそうですけど、僕らがチャイナタウン反対で街宣やったら、あいつらがホームページブログにいっぱい書いてるんですけど。バカだアホだ言われるのは、差別主義者だって言われるのは何でもないですけど、「池袋は我々のものなのに日本人の勝手を許すな」って書いてるわけですね。これは極めて特異な、民族意識とは違ったものなのでしょうけど、極めて特殊な意識を持っているんです。日本の社会にとって極めて危険なものであると思いますね。

名古屋のほうでは僕らの仲間が、華僑総会が——尖閣諸島の去年の漁船衝突事件の後に——華僑総会って名古屋にいる華僑が総会を開くんです。そこに抗議に行ったら、中からシナ人が出てきて「日本人は日本から出て行け」って叫んできたんですね。そういった意識っていうのは、他の外国人の方々には見られないですからね。いろいろな運動をすれば、いい出会いもすることもありま

したが、外国の人たちと小競り合いになったこともありますし、極めてみんな特異な、特殊な意識だったです。中華思想という風にいわれますけど。

そうしたら、どうしたら彼ら（保守派）が言えるようになるかなと。そうしたら、やっぱりどこかで一部極端なものを正々堂々と打ち出して、それが一定の地歩を得れば、彼らはそれに準じた、それに次ぐくらいのことは言えるようになるかと。世間の、世論の常識の枠組みを広げる作業はそういったものじゃないかな。だから僕は排害社というものを作って、まあとにかく目に余る、おどろおどろしい人の嫌がることを自分で一身に背負ってそれをやっていたら、他に続く人たちが「あいつらほどじゃないけれども」という前置きでそれに準じたことを言えるようになるしできるようになる。その結果っていうのは、この１年で大きく出せたのではないかなと思いますね。

在特会なんかと一緒にやっていますが、在特会も当時「私たちは排外主義ではない」ということを言ってたんですね。なかなかねえ、ナントカ主義とつくものってのは、大体まあ共産主義であれば共産主義の是々非々についてはみんないろいろと論ぜられるじゃないですか。社会主義についても無政府主義についても民族主義についても、みな是々非々を論じられる。こと排外主義になったら在特会ですら我々は排外主義ではないというわけですから、この意識はまず変えなきゃいけない。

なんで排外主義がいけないのか。絶対に思想や運動ということには、いいものもあれば悪いものもある。そう認識したうえで運動をやる必要がある。僕は排外主義は自分でやっていて、これは危険なものであるとそのくらいの認識はねえ、やっぱり。危険物取扱者資格を持っているわけでもないですけど、自分は常にガソリンや爆薬のような燃え易いものを手にして、それに火を近づけるようなことをしながら運動しているものである、というそういう認識は持っている。でもそれを全否定する、全肯定というのが、そもそも極めて不誠実な態度だと思いますから。

で、今まで排外主義というみんなダメという大前提ありきだったんですから、これについてどこが悪い、どこがいいという議論というのは誰かがそれをしないとできないですからね。その作業が今からの日本には必要なんじゃないかな。外国人に対する、外国に対する理解、知識が乏しい日本においては、ますます今後そういう作業が必要かな、というのがひとつのきっかけですね。

(在日韓国・朝鮮人に対する関心は) そんなに強いほうじゃなかったですね。ただ、どんどん在特会の運動が出てきて、在日の実態ってものを彼らが伝えてくれるにつれて、僕としては意識は持つようになりましたけど。今は多分、日本で在日って言葉が韓国朝鮮の人を指すってのは、意味としては間違っているじゃないんですかね。彼らは今、60万人を切ってますし、どんどん少子高齢化して日本人と結婚して、自分がもう日本人になりたいって日本国籍、帰化される方も多くいらっしゃいますけど。

シナ人は80万人いて韓国・朝鮮人よりずっと多くなってますし、年齢比率でいったら彼らの7割8割が20代から40代なんです。韓国・朝鮮人は今、3割4割以上が高齢者ですよね。だから、在日問題というのは韓国・朝鮮人問題からシナ人問題に完全に切り替わったと思ってますし。在特会のいう在日特権というのは、特権的扱いをしてるという事実がありますけど、運動としてなくしていくのもそうですけど、このままいけば在日韓国・朝鮮人はニューカマーを除いてですけどね、絶滅するという言葉はヘンですけど、ほとんどいなくなるんじゃないんですかね。あと一世代二世代で。日本列島にずっと住んでいて、彼らの民族意識ってものが、いくら民族教育をやっても——民族教育ってものがあと日本という地で一世代二世代もずっとはもたないですね。

彼らのアリの踊りなんかっていうのも、結局、徳島の阿波踊りみたいに一部に残された無形文化財みたいな形として、形を留めるぐらいになるものだと思いますけど。シナ人は違いますよね。どんどんどんどん増えてますし、一人っ子制度も

去年で終わっちゃいましたから。

彼らが得ている特権というのは、絶対に今のまんまであればシナ人が引き継ぎますから——実際に今そうなってるんですよ。大阪の門真市というところでは、生活保護の受給者の一番が韓国・朝鮮の方だったんですけど、平成18年にこれがシナ人にとって代わられて。内容も全部違うんですね。韓国・朝鮮の方で生活保護受給されている方の8割は高齢、高齢家庭です。シナ人の受給者の半数くらいが貧困ですね。高齢家庭は極めて少ないですよ。貧困ですけど、大阪で去年明らかになったような不正受給ですね、入国直後にそのまんま市役所区役所に行って生活保護くれ、こういうのが多くなってますから。

そもそも生活保護ってのは、厚生省の社会保険局の局長の通達でサンフランシスコ講和条約によって日本国籍を喪失した旧日本人であるところの台湾出身者、朝鮮出身者に対して受給を日本人に準じて支給するというものだったわけですけど。日本でもなかったところの人間が今いっぱい受給するようになってきてるわけですから、在日韓国・朝鮮人の持った特権がシナ人に引き継がれつつある状況に。今日本に来ているのは7割8割が若い世代ですけど、彼らも歳を取れば働けなくなって生活保護を必要とするじゃないですか。これは深刻な問題だと思ってますね。だから、それをなくすためにも先例たる在日韓国・朝鮮人の問題というのは、いったん綺麗に清算しなければ、在日シナ人の来る民族問題により大きな禍根を残すと思いますね。

6. 排 害 社

(1) 右翼でも市民団体でもないもの

市民運動もやって左翼の友達とも酒飲むなかで、「これが日本」の社会運動を作りたいと思ったのは、右翼団体とも市民団体ともつかないものを作りたかったんです。なんで右翼だったら、「大日本ナントカ同志会」ってなきゃいけないのか。別に法律で決まっているわけじゃないのに、そうつけちゃうじゃないじゃないですか。市民運動だっ

たら、「ナントカナントカのナントカナントカする市民の会」、なんでそんな名前じゃなきゃいけないのか。これは不思議なものじゃないですか。左翼だったら——極左だったら、「革命的共産主義者同盟全国委員会」とかいう名前じゃなきゃいけない。市民運動だったら、「ナントカナントカ市民ネットワーク」こういう名前じゃなきゃいけない、誰が決めたんですか。でもそれが何か1つの慣例になって、ムラ社会みたいな、運動・思想をめぐるムラ社会みたいなものができてる構造というのが、僕は面白くなかったですね。

だから市民運動が集まってるなかで、排害社なんて名前作って、旗も真っ黒白黒にして、みんな黒服で黒ヘルもかぶらせて、黒の腕章つけて編み上げ靴でやってたら、まあ新しい刺激になるだろうなと。そうしたら8月15日にみんなその格好でぞろぞろ靖国神社歩いてたら、機動隊に止められたんですよ。そうしたら、「ここから先は靖国神社大切に思う方がいますんで、ちょっとお帰りください」。こっちだって靖国神社大切に思ってるんだ、がちゃがちゃいって、僕らをアナーキストと間違えているみたいで。旗が黒で——ゲバ文字で黒で。それでこの運動は1つ正解だったなと思いましたね。右翼にも市民にも見えないものを作る。

早い話、みんな誰だって汚名を蒙るのは嫌なんですよ。誰だって差別主義者排外主義者といわれて、気持ちがいいものじゃないでしょう。特に日本の右派や保守ってのは、左翼以上に対面を世間体を取り繕うきらいが強いんですから。でも不思議なことに、彼らは世間体を取り繕うがゆえですかね、何か空気や同調圧力に極めて弱いんです。じゃあ誰かが率先して、排外主義者の名を持ってしななければ変わらない。そうしなきゃ日本の右翼も保守も正々堂々と言うべきことを言えないなと思ったのが、自分が率先して排害社を作ったきっかけなんですね。

団体を立ち上げる時に会員たちにこういうところで、創立メンバーたちと話をしてたんですよ。半分くらいが20代の若者で、半分くらいが30、40

（代）でしたね。その中でいろいろな案があったんですよ。団体名について・・・「大日本攘夷塾」というのがいいんじゃないか、ちょっと右翼みたいな。「攘夷を進める市民ネットワーク」はどうですか？これはちょっと何かぎこちないしヘンだな。一番みんなが反対したのが「排害社」だったんですね。みんなが反対したからこれはやらないかんと。創立メンバー全員が反対したってことは、既存の右翼運動、既存の保守運動をやった人間も拒絶反応を起こすくらいの急進的な名称であり、運動体になると。みんなそれを反対はしましたが、僕がやるっていったら吞んでくれて、それで排害社が生まれたんですよ。

全員が賛成するってことは——ユダヤですかね——全員が賛成したらそれを否決する。1つの英知だなあとと思いますね、あれも。全員が賛成するってのは、よほどつまらないことか、よほどろくでもないことですね。全員が反対するくらいの方が面白いんじゃないかなと思いましたね、その時は。

（2）「中国人」という敵手

（敵手は）第一にシナ人、その次にそれに関係する政治家・行政。次に彼らの大幅な受入れとTPPの推進などを進める経団連をはじめとした財界人。3つに絞って順序をつけて、会員たちにもそれは基本的に徹底させるようにしてまして。

僕はこういう団体運営みたいなものは、ラーメン屋の経営みたいなものだと思ってらんですよ。塩ラーメン屋がいっぱいあるところに、塩ラーメン屋を出店させてもつぶれるに決まっていますから。しょうゆラーメンがいっぱいのぎ削っているところに、しょうゆラーメン屋建ててもつぶれますから。その中で勝負するんだったら、東京にあるような次郎ラーメンだとかね、徳島ラーメンみたいなものとか、あるいは油そばだとかみんなが取り組んでいない分野のものを持ってくれば、あのところが500円600円で売ってても、こっちは800円900円でも勝負できる。隣が何かまたおいしい塩ラーメン出したから、うちでも塩ラーメン始めようかというのはしない。

放漫経営というのは本当に倒産の元ですからね。つれの実家のうどん屋が客が来ないものだから、うどん屋の店の半分をカラオケにして、それを酔っ払いに歌わせてたら今度はうどんの客が入らなくなっちゃってつぶれちゃって。本当に放漫経営というのは良くないですね。うどん屋はうどんを作ることに命賭けるべきですし、ラーメン屋は自分の作ったスープ一本で勝負すべきだと思いますから。あれやこれや手を出したら身が持たないですからね。仮処分や民事訴訟をいっぱい抱えて首が回らなくなっちゃいます。

最大の問題であるのに、今までどの団体も専門としてやってこなかったですからね。西村さんの主権回復が、池袋でチャイナタウン反対というのを軽くちょっとされていくくらいで。桜井さんのところもたまにちょっとしていくくらいですけど、1年を通してずっとこれに取り組んでいくというのはなかったですからね。

(3) ネットの活用

ネットというのは個人的なツールですから、ネットでもう完全に情報なんか収集できるものでもありません。排害社の会員にはとにかく Google で検索しているヒマがあったら歩け、と言っているんですよ。とにかく歩いて現場を見る。ネットの情報なんか得体の知れないものも多いし憶測も多いわけですから、とにかく歩く。電車の乗換えで3駅乗らなきゃいけないんだったら、その3駅歩け。とにかく歩くように若い会員たちには、みんなそういう風に言っています。歩いたら、何かを見つめますからね。小さなことでも。

(ネットの効果は)ものによりますけど、大体4分の1と100分の1と僕は言うんですけどね。1つの1枚のホームページを開いたら、そこにある先のクリックを押すのは4分の3になるんです⁽²⁾。4分の1はそこから先はクリックしないです。そこから先のリンクをまたクリックするのは、さらに4分の1になる。で、1つの告知を打ったら、デモであれば——集会であれば10分の1、デモであれば50分の1、物の販売であれば100分の1。

この法則ってのはなかなか崩れないんですけど。1,000のアクセスがあるところで何が物を売れば、10人買ってくれるんですよ。で、1万のアクセスあるブログでデモの告知を打ちますと、大体200-300人が参加。

(4) 参入の効果

(排外主義を掲げた効果は)ありましたね。在特会の幹部の中でも、ことここに至っては排外主義しかないというようになる人も出ましたし。いろいろな各団体が、自分達の催している集会の協賛・後援・共催団体に——まあ今までの付き合いがありますけど——排害社って入れざるを得なくなるわけですよ。この団体名を、普通の市民運動の団体が。そうすると自ずと意識はがらっと変わりますね。今までも「ナントカナントカの市民の会」が主催して、参加するのも「ナントカナントカの市民の会」ばかりのところ、に、「排害社」がぼんちと入ることによって、参加する人たちの意識も急に変わりますね。

だから、この1年で本当に僕の周辺というか行動する保守に限らず既存の保守の中でも、従来は排外主義なんて良くないとかって言ってた人間の言葉がやっぱり変わりましたね。もう排外主義じゃないんじゃない、排外主義でいいじゃないか、そういう風にやっぱり意識をこの1年で大きく変えられたんじゃないかなと思いますね。

7. 外国人参政権に関して

参政権(反対運動)ってのは、他の団体がやっているところでお手伝い程度させていただいていくんですね。外国人参政権みたいなのに、保守派は反対しますが、でも彼らは民主党の白眞勲とか、あるいはシナから帰化した張景子とか、平成19年の選挙で民主党から立候補した金政玉、こういう人間の政治参加についても嫌悪感をあらわにするわけですね。彼らは普段は、日本国籍を持ったものに参政権を限るべしって言っているわけですよ。

じゃあ彼らの政治参加については問題がない。

彼らを擁護すべきなんですよ、従来の言辞で参政権を批判するのであれば。日本国籍を持ってない者の政治参加じゃなくて、本質的には異民族による日本の政治への参加に反対しているのであると、そう言えいいだけのことですよ。それは民族差別になるといって、対面を気にして口に出せないわけですから、まだまだ日本の保守も弱いんですよ。

僕は、外国人参政権反対というのは、異民族の政治参加反対に昇華しなきゃいけないと思ってるんですね。外国人ってものの定義ですけど、日本国籍を取ってたらそれで日本国民同胞なのかってことについても、歴史的伝統的な価値観というのが、まったくそうではない。法務省の紙一枚の話ですから。

それで人間の持つ民族性や意識というものが変わるとは思えないし、たとえ日本国籍持っても浜松や群馬あたりで電車の中で大騒ぎしている日系ブラジル人の日本国籍持った子も、僕は日本人同胞とは思えないです。渋谷や池袋なんかで、たまに青龍刀抜いたり抗争でヤクザの手切っちゃったりする中国残留孤児の人間、マフィアがいますけど。あれも彼らが日本国籍持って日本の名前を持っていますけど、彼らを日本人だとは思えないですよ。日本語は——日本語不自由なものですけど、意識が日本にないですからね。

僕はそれを言ったら、日本国籍を持ってる持っていないというのは、極めて表層的で皮相な議論であって、もっとそれよりも深い民族的なものに議論を昇華していかなきゃいけないじゃないかなと思います。逆にブラジルに移住した日系人の一世で、ブラジル国籍を取得された人なんか、日本国籍ないですけど日本人の意識だし、広義で言えば彼らは日本人だと思いますけどね。そういう意味でいえば、外国人参政権ってものを国籍の有無だけ問うてそれを問題にしている今の保守の問題意識ってのは、極めてレベルの浅いものだと思います。だから僕はこれを——外国人参政権ってのに反対する運動は、民族問題まできっちりと昇華して、異民族と日本民族がどう向き合ってくるのか、

対峙していく問題にきっちりと据え付けなきゃいけないです。

あれ（参政権反対の盛り上がり）が一昨年で、去年の1月2月頃から僕はシナ人問題に直接向き合い対峙するように、急速になりました。その中でこれは国籍問題じゃないな、これは民族問題だと。もっといってしまえば生態系の崩壊ですね。ブルーギルやブラックバスが繁殖しているのと一緒に。この問題、日本国籍の有無ばかりに限った話をしてたらね、日本に来ている80万人100万のシナ人がみんな日本国籍とっちゃったら、同胞として迎え入れて選挙に参加させてあげるように擁護するのが従来外国人参政権反対論を駆使していた保守派の論拠によれば、そういう流れになっちゃうわけですから。「国籍持ってないからダメだよ」と言っていたのが、国籍取ったら同胞として歓迎しなきゃいけないはずですからね。でも彼らにはそんな気はないんです。ないのに、それははっきりと言えないですからね。その問題意識というのはきっちりとしてますね。

8. 活動を通じて

（1）活動のエネルギー源

若い14歳17歳くらいにこういう考えに目覚めて、こっちに来て運動するようになって、大学1年生の時に初めて靖国神社を昇殿参拝させていただいたんです。それで靖国神社に昇殿参拝しますと、本殿の中に御神体として大きな鏡が祀ってあるんですよ。大きな鏡は、当然参拝している自分達の姿が映るわけじゃないですか。鏡を見たときに、僕は英霊っていうものですね、英霊を祀るものが鏡であってそこに映っているのが自分達である。彼らの魂っていうものが僕らの中で生きているんだと。日本人の、僕らの中で生きてるんだ、と思ったときに今までの本で読んでいた知識云々でなくて、ものすごい実感として感動して涙を流しましたね。それなんか、1つの原体験のようなものを感じたんですよ。

で、その翌年にですね、硫黄島に遺骨収集に行ったんですよ。『硫黄島からの手紙』の舞台の日米

激戦の硫黄島に遺骨収集に行きました。まだいっぱいトンネルが掘ってあるんですよ、日本兵がたてた。その中に掘ってますとね、骨がごろごろごろ出てくるんですよ。拳くらいある手榴弾も出てきて大騒ぎになったこともあるんですけど。

掘っていたらきれいな骨が出てきましてね。人が本当に倒れて鉄砲、三八式歩兵銃を抱えたままの骨で、引き金をカチャッと引いた状態で弾が籠もっているんです。引き金をパンと打てば出るくらいの状態で倒れてなくなられた方です。その銃口がトンネルの外へ。外から来たアメリカ兵に照準を合わせてまんま……。祖先の遺骨が出てきて、亡くなられて60何年でまだ銃抱きかかえて姿を見たときに——硫黄島は暑いもんですから、トンネルの中はサウナのように暑いから汗まみれになりますけど、目から本当にとめどなくねえ。日本人を、我々子孫を守ろうとしてくれたと痛切な思いで。

それで集めた遺骨を茶毘に付すんですね。茶毘に付す時に、一緒に行った先輩が「いつも遺骨を燃やす時は不思議でな、海が凪いで風が止んで、煙が日本のほうに、本州の方に煙がなびいていくんだ」「そんな日本昔話みたいなことあるわけねえだろ」と思ってたんですよ。硫黄島といったら1200キロ離れた島ですから、周りも何にもさえぎるものもないですし、風が天気がいい日もビュービューずっと吹いているんですよ。モンスーンっていうか、太平洋をアメリカの方に向かって西風がずっと吹いているようなところで。それが遺骨を茶毘に付す時にですね、不思議と本当に風が止んで海が凪いで、燃やした煙がですね、本州の方に帰っていくんですよ、本当にもう。あんな不思議なものは本当に初めてみましたね。これはやっぱり、これもまた強烈な経験でしたし。

その後、帰ってからすぐですね、国土館大学で毎年皇居勤労奉仕をやってるんですよ。皇居に1週間くらい通って、皇居の掃除をするのが国土館の毎年の恒例行事でやってるんですけど。その最終日ぐらいに天皇皇后両陛下から御会釈をいただくんですが、その時に一緒に行ったのが、奉仕団

が並ぶわけですよ。天皇陛下の御前に。岡山や長崎のJAのおじちゃんやおばちゃんが来てたんですよ。週刊誌みたいな話するんですよ、おじちゃんおばちゃんたちが。「美智子さんって綺麗なのかしらね」「天皇陛下って背筋曲がってらっしゃらないかしら」。「何言っているんだこいつらは」と思っていたら、そこに両陛下が……。ざわざわしていたのが、いらしたら、静けさが耳に染み入るほどの静けさっていうんですかね、すっと静かになって。

天皇陛下が岡山と長崎から来られた奉仕団のおじちゃんおばちゃん——平成17年でしたか、その年岡山と長崎で台風で大きな水害があったんですよ。その時に「先の台風・水害ではどうでしたか、お体大丈夫ですか」。言葉かけた途端に、それまで週刊誌レベルの話をしていたおじちゃんおばちゃんたちが、皆泣き崩れたんですよ。まだ50代後半か60（歳）くらいの戦後生まれのおじちゃんおばちゃんだと思うんですけど。

それで僕らの——国土館の前に両陛下がいらっしゃって、「今年卒業されて就職される方はいらっしゃいますか」。そうしたら先生が陸上自衛隊に何名、航空自衛隊に何名、海上自衛隊に何名——国土館は自衛隊が多いですから——そういう風に先生が申し上げましたら、陛下が「そのものをこちらに」という風におっしゃられまして。それぞれ、自衛隊に就職が内定した先輩方を御前に召されて、「国を守るといのは極めて大変で尊いお仕事です。お体に気をつけてがんばってください」。そのようにおっしゃられたと僕は記憶しているんですけど、そのようにお言葉がありまして。そうしたら気が強くて喧嘩ばかりやっている飲んだくれのような先輩たちも、もう面を挙げられないうらいに泣いて、僕も泣きましてね。不思議なもんだなと思ったんですよ。

昭和21年の新日本建設に関する勅語⁽³⁾、いわゆる人間宣言というものがあって。でも僕は、まだ日本というのは変わってないな、遺骨を硫黄島で茶毘に付したときに煙が本州になびいていきまいたけど、「ああこの煙はここに帰らなかったんだ

な」って。陛下がおられて、そのお言葉に涙を流されて。「ここに帰らなかったんだな」——それが原動力じゃないかなと思うんですね。何聞かれても、僕の中ではそれしか出てこないですね。結局、この本を読んで感動した、この本を読んで影響を受けたってのは出ますけど、それはやっぱり知識や表層的なイデオロギーであって、それを越えた実感としてあるものじゃないですから。強い実感だと、僕はそれだけです。そのことです。

（２）活動で得られたもの

良かったことは、街宣をしますんで、街宣をして人前でしゃべって——すごく世俗な話ですけど、街宣でしゃべって機動隊ともぶつかって警察とも掛け合いをやって、シナ人朝鮮人とも丁々発止の言い合いをしますんで、人前で話をするにすごく慣れたもので、就職活動で面接する時にまったく困らなかったですね。就職氷河期といわれた時、僕は——みんな２、３０社受けて受かる受からないって時だったんですけどね——僕は７社受けたら５社くらいは受かって。もうやっぱり面接で臆せず正々堂々としゃべる。

その頃、就職活動の時期になったら、「ちょっと面接の練習するから付き合ってくれ」なんてみんな言って、学食で面接の練習を隣あちこちでやってるんですよ。知ってる人間が。「私は学生時代ボランティア活動…」「お前ボランティアなんかしてねえだろ」、知り合いに突っ込みなんか入れたりしてたんですけど。僕は就職活動の時には、学生時代何してましたかと聞かれて、さっき話してたようなことをしてましたって包み隠さず話したら、それでも内定くれましたね。落としたら街宣でもかけられるかな、と採用したのかもしれないんですが。

９．「さらに右」を志向すること——結語に代えて

中学時代からの右翼思想への傾倒、学生時代からの右翼運動への参加——排外主義運動の若い活動家のなかでいえば、δ氏は例外的な性格を多く

持つ。その意味で、属性や動機の面で彼を「行動する保守」の典型とみなすことはできない。彼の転換と方針からは、むしろ排外主義運動の分析をめぐる次の２つの論点を提示したほうがよいだろう。

第１は、既存の右翼が排外主義へと転換する可能性である。右翼運動の分析では外国人の増加が排外主義運動を生み出す可能性が指摘されてきたが（Szymkowiak and Steinhoff 1995）、現実はこの説を裏切ってきた。在特会の標的は、戦後ずっと日本に住んできた在日コリアンであり、外国人人口の増加とは関係なく運動が生起している。しかし、δ氏が標的とするのは国籍別人口で最大集団となった在日中国人であり、その点で上記の予測に沿って排外主義が生じている。その背景には、右翼ないし保守派の本音として、「異民族に対する不寛容」があることをδ氏が指摘したのは、基本的に妥当だと考えられる。さらに、既成右翼はルーチン化した行動ゆえに先細りしているという指摘に鑑みれば、生き残りをかけて排外主義を旗印とする既成右翼が現れる可能性もないとはいえない。

第２は、「さらに右」の運動が現れることにより、運動や言説が変化する可能性である。δ氏は、運動の言説空間に排外主義を意識的に持ち込むことで、過激な言説が受容される余地を作り出そうとしている。一方で、運動組織間の競合関係が運動の過激化をもたすという、タローの指摘に沿った展開が始まってようにも見える（Tarrow 1989）。タローの議論に従えば、運動の過激化により一部の先鋭的な行動と世論の乖離が著しくなり、暴力的な行動は増加するものの運動は衰退する。他方で、タローの抗議サイクル論を裏切る形で、過激な言説により排外主義に対する免疫ができるような展開は起こるのか。排外主義運動が表面化してから５年以上が経過した現在、その実態解明にとどまらず、軌跡の分析まで踏み込んだ研究が求められている⁽⁴⁾。

〔注〕

- (1) ただし、オランダのピム・フォルタイン党はナショナリズムには無関心であり、例外がまったくないわけではない (Rydgren and Holsteyn 2005)。
- (2) これは恐らく言い間違いで、リンク先のページを閲覧するのは4分の3ではなく4分の1だと思われる。
- (3) 正確には勅語ではなく詔書。
- (4) この点について詳しくは、以下の文献も参照のこと (Koopmans 1995; Traugott 1995)。

文献

- 樋口直人, 2011, 「東アジア地政学と外国人参政権」『社会志林』57巻4号.
- , 2012a, 「在特会の論理 (1)~(7)」『徳島大学社会科学研究所』25号.
- , 2012b, 「在特会の論理 (8)~(9)」『徳島大学地域科学研究』1号.
- , 2012c, 「『行動する保守』の論理 (1)~(3)」『徳島大学地域科学研究』1号.
- , 2012d, 「在特会の論理 (10)」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』8号.
- 堀 幸雄, 1993, 『増補 戦後の右翼勢力』勁草書房.
- Koopmans, R., 1995, *Democracy from Below: New Social Movements and the Political System in West Germany*, Westview Press.
- Mudde, C., 2007, *Populist Radical Right Parties in Europe*, Cambridge University Press.
- Rydgren, J. and J. Holsteyn, 2005, "Holland and Pim Fortuyn: A Deviant Case or the Beginning of Something New?" J. Rydgren ed., *Movements of Exclusion: Radical Right-Wing Populism*, Nova Science Publishers.
- Szymkowiak, K. and P. G. Steinhoff, 1995, "Wrapping Up in Something Long: Intimidation and Violence by Right-Wing Groups in Postwar Japan," T. Bjørge ed., *Terror from the Extreme Right*, Frank Cass.
- Tarrow, S., 1989, *Democracy and Disorder: Protest and Politics in Italy, 1965-1975* Clarendon Press.

Traugott, M. ed., 1995, *Repertoires and Cycles of Collective Action*, Duke University Press.

安田浩一, 2010, 「在特会の正体」『G2』6号.

———, 2011, 「ネット右翼にたいする宣戦布告」『G2』7号.

(付記)

本稿は科学研究費補助金による研究成果であり、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。